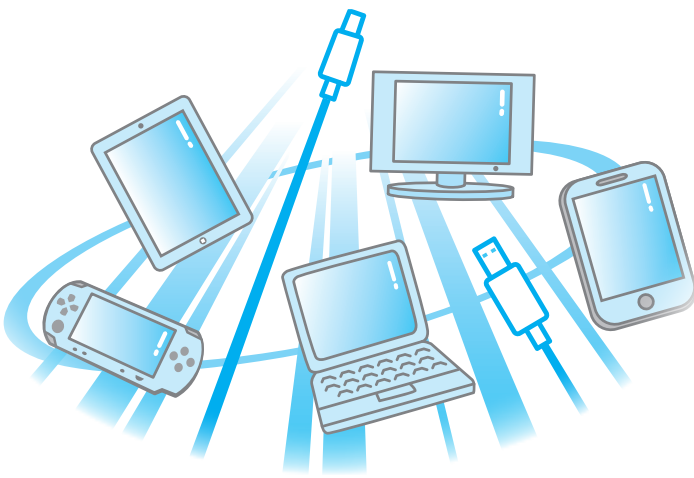


欧州ICT社会 読み解き術



SNS時代のイノベーション?…の巻

フェイスブック、ツイッターなどの、ソーシャルネットワーキングシステム(SNS)の利用者が、爆発的に増えている。筆者も遅ればせながら、2011年3月11日の「東日本大震災」を機に、ツイッターの効用に開眼。以来、ツイッターを通じて色々な人々と緩い繋がり(らしきもの)ができてきて、時々情報や意見を交換するようになったと言う。そんな筆者の目に飛び込んできたのは、「人の行く先を予告する」スマホが開発されたとのニュース。開発の背景には、フィンランド・ノキアが関連する研究開発コンテストがあるらしい…。



栗崎 由子

スマホが人の行く先を予告？

SNSの強みの一つは、人の繋がりや連鎖を速く、広く可能にし、自分が思いもかけなかったことを発見できることだと思う。私たち一人一人は、必ず何かを持っていて、例えば、友人・知人という人脈、何かに対する意見、知識、経験など。それは資源(リソース)である。大勢の人が一人ひとり、そういうリソースを出し合うと、「十一」を「二以上」の価値にすることが出来る。ちょうど、ブレインストーミングで、新たなアイデアを生み出すように。両者は、多数の人がリソースを出し合い、新しいアイデアを生み出す可能性のある仕組みという点で、似ている。

そんなことを考えていた折、「人の次の行く先を予告するスマホ」が開発されたというニュースが目に入り込んだ。生み出したのは、ローザンヌ工科大学(スイス)の三人の研究グループ。それは、モバイル・データ・チャレンジ(Mobile Data Challenge、MDC)という研究開発のコンテストを

きっかけに誕生した。

人がこのシステムを搭載したスマホを持つと、その人が次にどこに行くか、高精度で予告できるらしい。いろいろな目的に役立ちそうである。

広く世界にアイデアを募るノキア
そんなアイデアを生み出したMDCという仕組みは、大変興味深い。MDCは、携帯電話機製造メーカーとして有名なノキア社(本社ヘルシンキ、フィンランド)の、ローザンヌにある研究センター(NRC)と、イダップ(Idiap)という、人間とメディアのコンピュータ解析を専門にする研究機関(スイス)が主催している。

MDCの目的は、スマホに搭載された技術を使い、モバイル通信を人と社会に一層役立たせるシステムを生み出すことだ。ご存知の読者も多いと思うが、スマホには、全球測位システム(GPS)、ブルートゥース、加速度センサ、マイクロフォンやカメラなどが組み込まれている。それらを縦横に使いこなして人の行動への理解を

深める。

MDCは、その知識を活用し人類共通の財産になるようなシステムを生みだそうという、壮大な夢のあるプログラムだ。

MDCは、ノキア社のR&Dの仕組みの一つである。同社は、「オープン・イノベーション・ネットワーク」という思想のもとに、世界一二カ所にNRCを置いていく。設置場所は、スイスを含む欧米先進国のほか、中国（二カ所）、インド、ケニヤなど、経済発展の目覚ましい地域にもある。スタッフは五〇〇人（NRCのウェブサイトにによる）。

ノキアのR&Dシステム

NRCは、ノキア社のR&D推進機関である。各NRCは、所在する国の理工科系学部を持つ大学と密接に提携し、研究開発を進めている。

例えば、スイスでは、NRCはローザンヌとチューリヒの工科大学と合同で研究開発を行なっている。つまり、オープン・イノベーション・ネットワークとは、ノキ

ア社と研究機関（大学）との間でリソースを相互利用し、そこから相乗効果を生み出す仕組みと言える。ノキア社は、テーマと、資金、必要な実験フィールドを提供しているが、これは、世界各地の若い研究者に強い動機を与えるだろう。同社は、このような仕組みを通じ、次々にイノベーションを起こし、それを通じて科学の進歩、モバイル利用者の便宜に貢献し、ひいては会社の利益ともなることをめざしているかのようだ。

このような、広くアイデアとスキルを募る仕組みは、ノキア社のアプリケーション開発にも見られる。同社は、「ノキア・デベロッパ」という仕組みを提供、それを通じてノキア社技術陣は、世界中のデベロッパをサポートし、多様なアプリケーションの誕生を助けている（<http://www.developer.nokia.com/>）。

ノキアの社風

なぜノキア社は、このような、仕組みを確立させたのだろうか？ フィンランドは、教育程度

も高く人的資源はあるものの、人口が少なく（約五三〇万人）、国土の大半は寒冷気候に覆われている。天然資源にも恵まれていない。そういう国で成長した企業だからこそ、R&Dでも、自国に閉じず、国外に広く人材やアイデアを求め、協力し合うという考え方が身についているのではないだろうか。

また、ノキア社には、社会貢献の伝統がある。ノキア社が創業された時代には、若い人々に奨学金を出していたと聞く。

こういった仕組みから誕生したシステムやアプリケーションが、ビジネスですぐに収入になるかどうかは、別の問題かも知れない。そこから利益を上げるためには、アイデアだけでなく、コストや販売チャネルなど、他の多くの要素を考慮に入れなければならないからだ。

けれども、長い目で見ると、このようなR&Dの仕組みは、人類に貢献するのではないだろうか。R&D参加の門戸を広く開け、知恵とアイデアを大勢から集めると

いう目標を与えることにより、結果として、人材を育てているからだ。それはまた、りっぱな企業の社会貢献となっている。

現在、欧州の経済紙には、ノキア社の経営状態を懸念する論調が時折報道されている。

が、どうしてどうして。この開かれた態度は、組織の強さを示しているのではないだろうか。自分とは異なるものを取り入れる、それを受け入れて自らを変化させていくことから、それは時代の変化を生き抜く強さだ。

.....

栗崎由子（くりさき よしこ）

一九七八年、日本電信電話公社入社。先端技術の商品化、市場調査等を担当。パリの経済協力開発機構（OECD）、SITA（航空会社間の世界規模データ通信会社）で、情報通信政策や市場戦略調査担当。現在は独立コンサルタント。ボランティアとして、BHNテレコム協議会ヨーロッパ代表。関心領域は、ICTと人・社会・産業との相互関係、情報化社会のCSR。ジュネーブ在住。

yoshiko@geneva-kurtsaki.net